

女の気持ちよす
教えてアゲル♡

によたにかれっ!
~女体化したカレは
女の子に抱かれちゃう~

R18
ADULT ONLY

野良猫&ゆるこ
女体化合同本

俺の名前は日向ヨウタ
職業 家庭教師

あのーお嬢様…
これはどういうう？

しゃべらないで

そんな俺は今回

厄介な子を
教えることになりました

先生は私の
抱き枕なんだから

先生はお嬢様の 抱き枕♡

原案:野良猫 漫画:いるこ

遡ること数日前

ここが氷室家のお屋敷か…

さすが業界大手の製薬会社

ピンポーン

紹介で来ました家庭教師の日向ヨウタです

お待ちしておりました正面の玄関からお入りください

家庭教師が長続きしないって聞いたけどいったいどんな子なんだろう？

一日も持たずにクビにされた人も多いうって言うし

ようこそおいで下さいました
ヨウタさん

私はこの屋敷の主
氷室サユと申します

きれいな子だな

高●生って聞いてたけど
もっと大人に見える

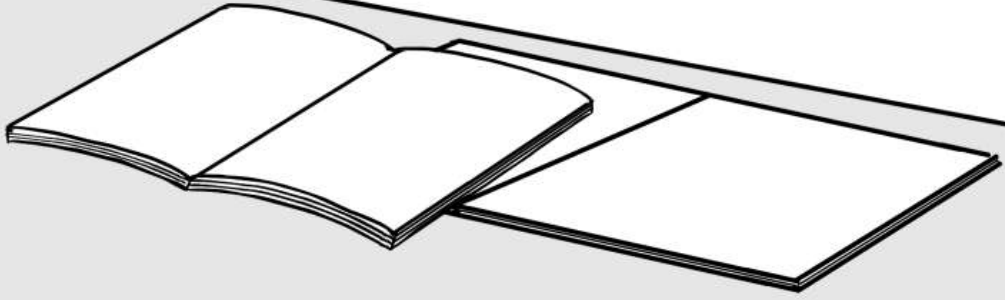
本日より私の家庭教師
お願い致します

よ、
よろしく申し上げます！

凡人の僕が
こんなお嬢様の家庭教師かあ…

緊張するけど
頑張るか！

サユさん
少し休憩にしましょうか



ふふ…流石ですね
評判通りの
分かりやすい教え方

それに親身になって
聞いてくださる…

ええ私
とても貴方が
気に入ってしまいました

あはは
光栄です

サユさんそろそろ
続き始めましょうか

そう…
とつてもね…?

そうですね

そして今日

えっと…
この問題は…その…

ふふ
困ります先生…
きちんと教えて
頂かないと♪

きちんと教えて
頂かないとって

い、いきなり女性にされたら
誰だってこうなりますよ！



だいたい
なんでこんな事を…!

あら何か問題でも?

ってか
あの薬はなんなんですか?


父の会社で研究しているお薬
『オンナニナル』ですわ

安直なネーミング
コバヤ●製薬ですか?

早く元に戻してください!!

とても可愛らしくて
素敵ですよ

ところで
家庭教師の他にもお願いしたい
『お仕事』があるのですが…




というわけで
今に至る

どうしてこんな事に…



キラッ



こんなに気持ちよさそうな顔で
寝られたら
嫌とは言えないよな…

でも

それから俺は
昼は家庭教師
夜はお嬢様の抱き枕として
氷室家で働くことになった

せっかくですので
こちらのお召し物に
しましょうか？

お嬢様！

次の日

少しヘアアレンジを
変えてみましょうか？

お嬢様！

次の日

今日はメイクに
挑戦してみましょうか？

お嬢様！

そんなある日

先生
少しお話したいことが
あるのですが…

なんですか？
改まって

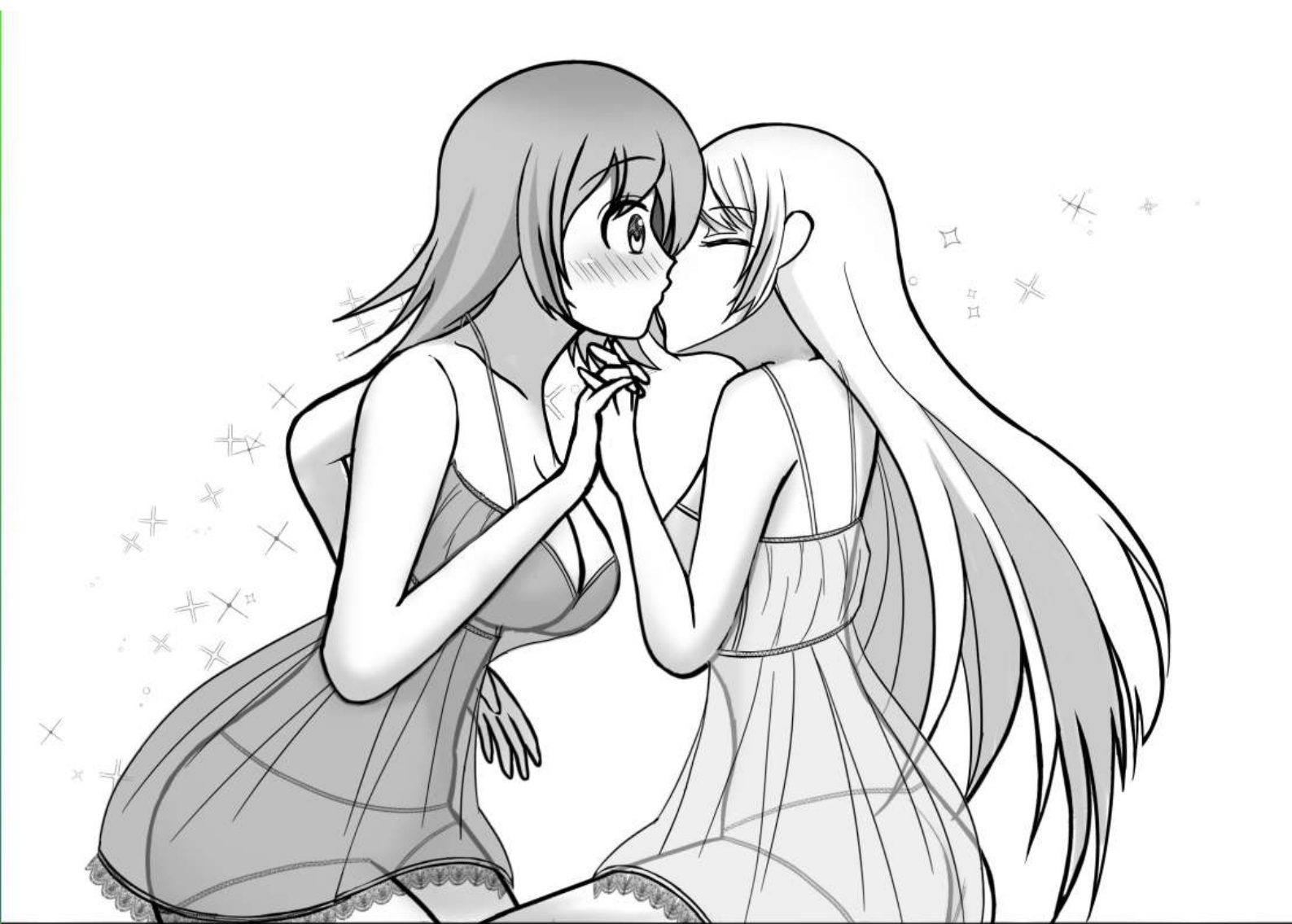
先生……
女の子の身体

もっともっと
味わってみませんか……？♡

へ？

ドキッ

ぎゅっ



ねえ先生
先生ならご存知かと思いますが
抱き枕の『抱く』という単語には
もう一つ意味がありますよね♡

頭がぼーつとする
抱く…?意味…?…?

ほちー♡

ふっ♡

オフ会で
・
・
・

原案 .. いるこ
文 .. 野良猫

とある閑静な住宅街に建てられた一軒家。その中の『YUKITO』と書かれたネームプレートの下がった一室で少年——河合ユキトが外出前に姿見で最後の確認をしていた。

「へ、変なとこない、よね・・・よし、大丈夫・・・！」

呟いた声は男にしては高く、どちらかと言えばハスキーな女性のそれを思わせる。さらに彼の服装自体も一般的な男子高校生のそれとは一線を画していた。

大きく丸い襟が印象的な白のトップスと縁をレースで彩ったライトグレーのスカートが一体になったセットアップ。首元ではリボンを二つ重ねて段になるよう結び、その上からワンスイズ大きな薄手のパーカーを羽織って性別の出やすい肩幅や手先などを覆い隠している。元々細い脚は収縮色の黒いタイツを穿いているおかげで女性のそれと遜色ないほどになっていた。

顔も元々中性的な事もあってメイクは最低限施しただけで女の子と見紛う程に可愛らしく、加えて黒いロングのウィッグを被っているのではほど注意深く観察しなければ女の子だと思われる程に仕上がってる。

最後にもう一度だけ全身を確認し、スマホを見るともうすぐ家を出なければいけない時間が迫っていた。

「やば、そろそろ出なきゃ・・・！」

傍に置いてあったレディースの白いショルダーバッグを掴むとパタパタと慌ただしく玄関の扉をくぐった。

「ふう・・・」

何とか予定通りの電車に乗れた安堵で一息つき、バッグからスマホを取り出す。予定欄には【14:00～オフ会】と表示されており、その下には待ち合わせ場所や前日に調べておいた最寄り駅などの細かな情報も記されていた。

（オフ会、かあ。緊張するなあ・・・あの『黒魔女』さんと直接会えるなんて）

手癖のように開いたのは他人の呟きが延々と流れてくるSNS。そのダイレクトメッセージでは『黒魔女』というアカウント名とのやり取りが頻繁にされており、仲の良さがうかがえる。何となくスクロールしてみると今まで交わした会話——高校生活の悩みや女装のアドバイス、他愛ない雑談など

ーが流れ、懐かしくなって頬を緩める。
と、そこで一枚の写真に辿り着く。

勇気を出して『黒魔女』に送った最初の女装写真。今から見れば拙い部分も多く、一目で男と分かるほどに低い出来だ。しかしそれでも相手は「可愛い」と褒めてくれ、以降度々相談にも乗ってくれるようになった。思えばこの写真がきっかけで仲良くなったんだな、と誰にも趣味の事を話せなかった過去の事を思い返す。

ユキトは幼い頃から可愛いものが好きだった。

ヒーローや恐竜などいわゆる「男の子向け」のものもそれなりに好んでいたが、それ以上に女の子のキラキラとした服やアクセサリーは彼の心をつかんで離さなかった。元々の顔立ちが女の子に近い事もあり、親戚の姉はそんなユキトに自身のお下がりなどをプレゼントしては着せ替え人形にして一緒にしゃぎ、時にはそのまま外出する事もあった。外に出れば女の子に間違えられ、親戚の叔父や叔母なども怪訝な顔一つせず本心から『可愛い』と褒めてくれ、恥ずかしがりながらも内心嬉しく思っていた。

しかし身体は成長するにつれてだんだん肩幅は広くなって

筋肉がつき、手もゴツゴツと固くなって意思とは無関係に『男』へと近づいていく。幸い中性的な顔立ちはそのままであったものの、貰ったお下がりの服を着ても『女の子』ではなく『女装した男の子』という印象が拭えず、どこか虚しさや寂しさというものを覚えるようになっていた。

そんな時に出会ったのがネットの世界でT S Fと呼ばれる性転換を主軸としたジャンル。男が女に、女が男になる話やシチュエーションの数々はユキトの心に影を落としていた穴をピタリと埋め、自分は女の子になりたいのだとこの時はっきりと自覚した。

そこからSNSで同じ趣味を共有するためのアカウントを作り、自分から積極的に交流を広げてコミュニケーションを増やしていった。その時に『黒魔女』と知り合い、少しずつ会話を交わしていく中で徐々に打ち解けていったのだった。

『○○駅、○○駅です。出口は・・・』

物思いに耽る頭を電車のアナウンスが現実へと引き戻す。気が付けば目的の駅に到着しており、慌ててスマホをしまようと急ぎ足で電車から降りた。

待ち合わせ場所へと近づくたびに『黒魔女』に会える実感がどんどん強くなっていき、ドキドキと心臓が跳ねる。少し歩くと指定された銅像がすぐ目に入り、これならばすぐ会えるだろうと近くのベンチに腰を下ろした。

(『黒魔女』さん……どんな人なのかな。女の人っていうのは分かっているけど……やっぱり美人さん……?)

ソワソワと落ち着かない気分で夢想するのは相手の容姿。

女装のアドバイスを貰う際に送られてきた自撮りで長い黒髪の女性だという事だけは分かっているが、当然顔までは写っていないかったので顔立ちなどは謎のままだ。しかし髪の艶やかさや肌のきめ細かさ、ほっそりとした指などの写っている部分だけでも丁寧にケアをしている事が手に取るように分かり、普段交わしているメッセージの柔らかさと合わせて分からないはずの顔まで何となくイメージ出来てしまう。

柔和な顔立ちで、その微笑みは日差しのように暖かく、黒い髪はサラサラと美しく流れている。そう、ちょうど視界を横切った女性のような――

「あ、いたいた。『ユキ』ちゃん！」

「っ、もしかして『黒魔女』さん……?!」

まさしく思い描いていた姿そのものの女性が明るくユキトへと声をかけてくる。SNSでの活動名である『ユキ』という名前で呼ばれた事からも彼女が『黒魔女』だろう。

腰まで伸びた長い髪は艶のある漆黒で、星の無い夜を思わせる瞳は見ているだけで吸い込まれそうになる。透き通るように白い肌とは対照的に唇は鮮やかな桜色をしており、その下には小さなホクロがあった。

クリーム色の薄いニットセーターには縦のラインが走り、白のロングスカートが風になびいてふわりと揺れる。だがその上からでも女性らしくメリハリの利いた身体つきがはっきりと分かり、彼女のスタイルの良さをさりげなく主張していた。

予想通りの、しかし予想以上の美人に声をかけられたユキトはやや緊張しながらも立ち上がって挨拶をする。

「こ、こんにちは。よく分かりましたね。そこそこ人がいるのに……」

「ふふ、そりゃあ分かっちゃうわよ。だってユキちゃん、この中で一番可愛いんだもの」

「ふえっ……」

メッセージ上では何度も言われた言葉だが面と向かっては

つきり『可愛い』と言われてしまい、思わず頬が赤くなる。そんな彼の様子が気に入ったのか、『黒魔女』は——夏川フユミはくすくすと上品に笑ってユキトの反応を楽しんでいた。

「そうそう、人前じゃ『黒魔女』なんて呼びづらいでしょう？ 私の事はフユミって呼んで」

「わ、分かりました。でもそれって・・・」

「そう、私の本名。特別にユキちゃんにだけ教えてあげる♡」

人差し指を唇に当て、ウインクをして「内緒だよ」と言わんばかりに微笑む。綺麗な大人の女性の悪戯をする子供のような仕草と表情にユキトの心臓がドキリと跳ね、それを表に出さないようにするのが精一杯だった。

そんなユキトの内心を知ってか知らずか、フユミはユキトの手を取って優しく握る。不意に感じる手の柔らかさと温度に驚く暇もなく、少女のようにはしゃいだフユミに手を引かれた。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか。せっかく会えたんだし、楽しい時間にしましょう！」

「黒魔女・・・じゃなくて、フユミさんっ・・・！ちょっと待ってくださいっ・・・！」

ユキトの静止が聞こえていないのか、フユミはそのままずんずんと歩き出すのだった。

どうにかして手を離してもらい、並んで歩く事数分。そういえばどこへ向かっているのだろうか、とフユミに聞いてみると朗らかな笑顔と共に今日の『デート』についてのプランを話し出した。

「せっかくだから男の子一人じゃ普段出来ないことや行けないところに行きましょう？」

「普段行けないようなところ・・・？」

「ふふ。まずは・・・ここ！」

その言葉と共にちようど目的地に着いたのかフユミの足がピタリと止まる。彼女が自信満々に指したのは最近話題の女性服を専門に扱う洋服店だった。

「ふふふ・・・ここでユキちゃんのお洋服選んであげたかったのよねえ・・・♡さっ、入りましょ？」

「は、はいっ！」

ドキドキと高鳴る鼓動を抑えながらフユミの後に続いて店に入るユキト。この店の存在はもちろん知っていたし、いつかは入ってみたいと思っていたのでそういった意味でもドキドキしていたが、それ以上に別の理由でもドキドキとしていた。

(や、やっぱり女の人しかいない・・・！こんなところに僕がいて良いのかな・・・)

パステルカラーを基調にした店内はキラキラとした雰囲気。これでもかと放っており、他の客もいかにもオシャレが大好きな女の子といった感じの人ばかり。いくら可愛いものが好きで女の子に憧れているユキトと云えど、流星に引け目を感じざるを得なかった。

と、そう思っていたところにまるで忍者かのように足音もなく迅速に店員が声をかけてくる。反射的にフユミの後ろに隠れてしまったが、それを察したフユミが代わりににこやかに対応してくれた。

「いらっしやいませ！本日はどうされましたか？」

「ええ、この子とデートで服を見に来たんです」

「あらあら・・・♡それはお邪魔致しました。では何かあれば

お手伝い致しますので、お気軽にご相談下さいね」

「ありがとうございます」

『デート』という言葉で全てを察したのか、潔く身を引く店員。と、隠れていたユキトと目が合う。まさか女装がバレて店から追い出されるのでは、と血の気が引いたが、そんな事は全く無くにつこりと笑って胸の前でガッツポーズをしながら声をかけてきた。

「デート、頑張ってくださいね！ここは女の子同士のカップルさんも多く来店されるので気兼ねなくお楽しみください！」
「あ、うう・・・は、はい・・・」

ユキトが隠れた理由を同性カップルゆえの周囲の煩わしさと勘違いしたのか、明るく励まして去っていく店員。女の子として見られた事が嬉しいやらカップルとして見られた事が恥ずかしいやらで顔を赤くしていると、ふと手に温かいものを感じた。いつの間にか手が握られており、それも指同士をキュッと絡ませる恋人繋ぎ。温かくすべすべとした指が優しく、だがしつかりと絡み付いてくる感触にドキドキしているとフユミがほんのりと頬を染めて笑いかけてきた。

「ふふ、女の子同士のカップルですって♡実は私たち、周りから見たらお似合いなのかしら？」

「も、もうっ、フユミさんっ・・・！」

「良いじゃない♡今日は女の子同士のカップルとして楽しみましょう？ね、『ユ・キ・ちゃ・ん♡』」

ふう、とわざわざ耳に吐息がかかるような距離でゆっくりと囁くフユミ。自分が今どういう存在なのかを強調されるような吐息混じりの言葉にゾクゾクと得体の知れない興奮がユキトの全身を駆け抜けていったのだった。

その後は二人であれこれ服を見たり、お互いにどんなものが似合うかを話しながら店内を回っていく。一通り散策が終わった後はフユミの希望通りユキトの服を選ぶ事になった、のだが。

「あ、あのっ、フユミさん！ここ、これは流石に恥ずかしいですよ・・・」

試着室から出てきたユキトはよほど恥ずかしいのか、今に

もカーテンを閉めて中に戻ってしまいそうなほど赤面している。

上はダボっとしたサイズの大きい白のリブニットセーターだが、下は太ももの半分程度しか丈の無い黒のミニスカート。先ほどまで穿いていたタイツは着替える時にフユミから脱ぐよう言われていたので、ほっそりとした白い脚が惜しげもなく晒されていた。

ユキトがスカートを穿く時は必ずタイツも一緒に着用していたし、そもそもこんなミニスカート自体初めてなのでそのヒラヒラとした頼りなさで顔から火が出そうになる。せめてもの抵抗としてスカートを手で押さえて内股になるが、元々の防御力が無いに等しいのであまり大差は無かった。

「良いじゃない！可愛いわ♡」

そんなユキトの恰好や恥じらいがお気に召したのか、弾んだ声で笑顔を浮かべるフユミ。店内撮影が禁止されていないければこの場で何枚も写真を撮っていたらとうという勢いだ。

「それにしても・・・やっぱり私の見立て通りね。ユキちゃん、脚がキレイなんだからタイツなんていらんじゃやない？」

「そ、それでも生足はまだ恥ずかしいですよっ！」

「あら、それは残念。ユキちゃんが嫌がるなら無理強いは良くないわね。・・・でも、可愛いのは本当よ♡私は脚を見せてくれた方が好み♡」

「ツツツツ~~~~!!！」

クス、と優雅にすら思える余裕の笑みで真っ向から『可愛い』と言われ、嬉しさと恥ずかしさが臨界点まで達したユキトは声も出せず耳まで真っ赤にしなが勢いよくカーテンを引いて試着室へ戻る。その後、どうにか気分を落ち着けるまでにたっぷり十分以上もかかってしまったのだった。

「ありがとうございます！またのお越しを」

入店した際に話しかけてきた店員に見送られて店を出る。申し訳なさそうな表情をしているユキトの手には紙袋が握られており、中には先ほど試着した白いリブニットセーターと黒のミニスカートが入っていた。

「本当に良かったんですか？買って貰っちゃって・・・」

「良いの良いの♡私がユキちゃんにプレゼントしたいって思

ったんだもの」

「・・・じゃあ、遠慮なく頂きますね。ありがとうございますす」

紙袋を開き、改めて中の服を確認すると思わず笑みがこぼれる。初めてのミニスカートという事で着る時はあれだけ恥ずかしがっていたものの服自体の可愛さは気に入っていたらしく、フユミがプレゼントしてくれた事も相まってどうしても嬉しさが表に出てしまう。フユミからすればその笑顔だけでもプレゼントした甲斐があったというものだ。

「さ、どんどん行きましょ！次は・・・そうねえ、ランジェリーショップでも行きましょうか♡」

「ちよっ・・・?!そ、そこは流石に・・・！」

「ふふふっ♡ほら、早く早く！」

「わあっ!？」

困惑するユキトを余所に、再び彼の手を取って駆け出すフユミ。女性らしい余裕と少女のような無邪気さが混在するフユミという女性にユキトは振り回されっぱなしだった。

そこからもどんどんデートは続き。

くランジェリーショップく

「あ、これユキちゃんに似合いそう！見て見て、このブラのレース♡」

「ああ、あのっ、流石に下着は恥ずかしいっていうか、今も男物でっ・・・！」

「あら、だったらちよほど良いわね。この際だからお姉さんが可愛いを選んであげる♡」

「ひっ、ひゃあっ・・・！」

くコスメショップく

「この色可愛い・・・今日買ってもらった服に合うかも？」

「あらユキちゃん、センス良いわね。それならもっと可愛くなると思うわ♡」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふふ、赤くなっちゃって・・・本当に可愛い♡」

くアクセサリーショップく

「フユミさん、このヘアピン可愛くないですか？」

「ええ、可愛いわね♡雪の結晶モチーフだし、ユキちゃんによく似合いそう」

「じゃあ、良ければフユミさんにもプレゼントさせて貰えますか？今日の記念にお揃いで付けたいなって」

「ユキちゃん・・・！もう、大好き！」

「わぶっ？！フユミさっ・・・苦しっ・・・！」

そうして様々な店を巡り終えた後、休憩として近くのスイーツショップへと立ち寄った。

「いらっしやいませ。女性の方二名様ですね。本日はレディースとなっておりますので、限定スイーツをご用意しております」

にこやかに女性店員に案内され、二人は席に着く。軽く周囲を見回してみると流石レディースというか、女性しか見当たらなかった。

と、やはりこんな状況では引け目を感じてしまうのかユキトは座席で縮こまっていた。

「うう・・・その、本当に良かったんでしょうか？『女性二名』っていうのを訂正しなくて・・・なんだか騙してるみたい

そこからもどんどんデートは続き。

くランジェリーショップく

「あ、これユキちゃんに似合いそう！見て見て、このブラのレース♡」

「ああ、あのっ、流石に下着は恥ずかしいっていうか、今も男物でっ・・・！」

「あら、だったらちよほど良いわね。この際だからお姉さんが可愛いを選んであげる♡」

「ひっ、ひゃあっ・・・！」

くコスメショップく

「この色可愛い・・・今日買ってもらった服に合うかも？」

「あらユキちゃん、センス良いわね。それならもっと可愛くなると思うわ♡」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふふ、赤くなっちゃって・・・本当に可愛い♡」

くアクセサリーショップく

「フユミさん、このヘアピン可愛くないですか？」

「ええ、可愛いわね♡雪の結晶モチーフだし、ユキちゃんによく似合いそう」

「じゃあ、良ければフユミさんにもプレゼントさせて貰えますか？今日の記念にお揃いで付けたいなって」

「ユキちゃん・・・！もう、大好き！」

「わぶっ？！フユミさっ・・・苦しっ・・・！」

そうして様々な店を巡り終えた後、休憩として近くのスイーツショップへと立ち寄った。

「いらっしやいませ。女性の方二名様ですね。本日はレディースとなっておりますので、限定スイーツをご用意しております」

にこやかに女性店員に案内され、二人は席に着く。軽く周囲を見回してみると流石レディースデーというか、女性しか見当たらなかった。

と、やはりこんな状況では引け目を感じてしまうのかユキトは座席で縮こまっていた。

「うう・・・その、本当に良かったんでしょうか？『女性二名』っていうのを訂正しなくて・・・なんだか騙してるみたい

で気が引けるっていうか・・・」

「良いんじゃない？だってあなたは女の子でしょう？ね、

『ユ・キ・ちゃ・ん♡』」

「うあ・・・」

再び自分がどういう存在なのかを強調されるような呼び方をされ、耳まで赤く染まってしまふ。

女の子扱いされて嬉しいはずなのに、どこかむず痒くなつてしまうような不思議な気持ち。このままフユミに女の子扱いをされ続けると本当に自分が女の子なんだと錯覚してしまふいそがだ。

(フユミさん・・・何だか不思議な人だな・・・本当に『魔女』さんみたい)

運ばれていたお冷に口をつけるフリをしながらかっそりとフユミを見つめる。

艶めく長い黒髪に白磁の肌、モデル顔負けの美貌にスレンダーなスタイル。『年上のお姉さん』というだけでは説明が付かない程大人びた雰囲気を感じているかと思えば純真無垢な女の子のような一面もあり、すぐ隣にいるようで実は遥かな高みからこちらを弄んでいるような、不思議な距離感。

一つ一つ思い返してみると、おとぎ話に出てくるような『魔女』そっくりだ。

(・・・なんてね。魔女なんているわけないのに)

ゴクン、と自身の馬鹿な妄想ごとお冷を飲み下してグラスを置くとニコニコとこちらを見つめていたフユミと目が合う。どうやら盗み見していた事がバレたらしく、急に恥ずかしくなつて視線を逸らしてしまつた。

「お待ちせいたしました。こちら、レディース限定の『季節のフルーツケーキ』でございます」

と、ちょうどそのタイミングで注文していたスイーツが運ばれてきた。目の前に置かれたケーキにはフルーツがふんだんに使われており、非常に色鮮やかだ。

「わあ・・・！可愛いですね！」

「ええ、それにとっても美味しそう♡」

飲み物も含めた配膳が終わるや否や二人で手を合わせ、いただきますの挨拶をしていそいそと食べ始める。甘い物に舌

鼓を打つ彼女たちは実に幸せそうだった。

早々にケーキを食べ終わって飲み物を傾けながらのんびりと会話を楽しみ、満足して店を出る。外は既に夕日で照らされ、オレンジ色が目に眩しい。

「あ、もうこんな時間。楽しい時間はあつという間ですね……」

「ええ、本当に……ねえユキちゃん、まだ時間は大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。明日も学校は休みなので、ある程度遅くなくても問題ないです」

「それは良かった♡せっかくだし、ユキちゃんが今日買ったお洋服を着ているところが見たいなあ♡」

「そ、それは……！まだ恥ずかしいっていうか、あんな短いスカートで外出するのはちよつと……！」

少し前に体験したミニスカートのあまりの頼りなさを思い出して顔が赤く染まっていく。確かに買った服は可愛くて気に入っているし、家で着る分には楽しみなのだが、それで外出となるとまだハードルが高い。

「大丈夫、こんな事もあろうかと近くに二人きりになれる『個室』を予約しておいたから♡」

「な、なるほど……フユミさんにだけ見せるんだったら大丈夫、かな？ところでその『個室』って具体的にはどういうものなんですか？漫画喫茶……は着替えるスペースが無いでしょうし……」

「ふふふっ♡『い・い・と・こ・ろ』、よ♡」

内緒話をするように立てた人差し指を添えた笑顔は、極上の蜜と極小の毒を孕んでいた。

「ここって……ホテル、ですか？」

「ええそうよ。さ、入りましょ」

案内されたのは小綺麗な外観のホテル。ただところどころ装飾が妙に凝っており、どこか城のような雰囲気を感じる。とはいえユキト自身ホテルには疎いので「こういうもの」だと適当に受け流してしまった。

中に入ると当然受付もあったのだが、何故かほとんど壁で遮られており見えるのはお金や部屋の鍵をやり取りするであ

ろう小さな「窓」から覗く手元のみ。流石に違和感が膨らんでくるが、ユキトが何かを言う前にフユミが受付を済ませた。

「女子会プランでご予約の夏川様ですね。お部屋はこちらになります」

「ありがとうございます。ユキちゃん、行きましょ？」

「へっ?! あ、はいっ」

そうして連れられるまま、ラブホテルの中へ二人で入っていったのだった。

続きは製品版にて